

週刊碁

【2013年2月18日号】



笑顔弾けるハマツ子



碁の授業は横浜市内では初の試み

横浜市立白幡小で碁授業

一月二十九日、横浜市立白幡小学校の三年生二クラスで、総合的な学習の授業として、約一時間半を使って、碁教室が開かれた。先生を務めたのは三村芳織

二段。生徒は三十七人。授業の初めに「碁を打てる人、手を挙げて」と聞くところ、ほとんど手が挙がらなかったけれど、ルールや勝敗の決め方などを簡単に説明

した後、七路盤での実戦を交えながら三村二段らが教えて回ると、あっという間に対局が出来るようになっていった。陣地を囲んだり、石を取り合ったりして、みな夢中で盤面を追う。中には、終局の整地間際になつて自分の負けを悟って、泣いて話をした。

同校・永池啓子校長は、

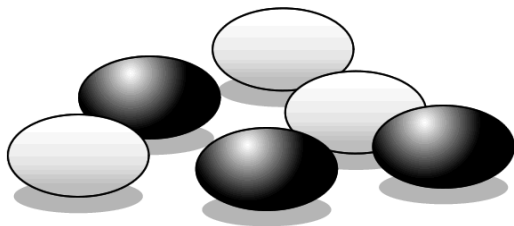
き崩れる子がいたり、とにかくことでは飲み込みが早い。

同校での碁教室は一回のみの条件で開催され、三年生の残り二クラスでも開催の予定である。終局のタメが理解できるところまで、せめてあと一回開催出来れば、というのが碁関係者の願いではあるが、これは仕方がない。横浜市内には小学校が約三百五十、中学校が約百八十校というが、碁の授業は初めての試みで、当日は同市教育委員会の山田巧教育長らの視察もあった。山田氏は、「こどもだから、飲み込みが早いし、読むのが早い。三村さんの説明も分かりやすい。碁は昔から日本伝統の、優雅なものです」と話した。

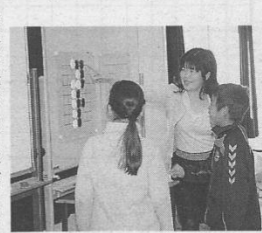
碁授業に初めて接して、「勝っても負けても、最後まで」と、碁の持つ教育効果にありがたうございました。と、きちんと挨拶をしましうだった。

同校では土曜に塾を開

碁教室



日本棋院のご協力を得て、3年生を対象に碁教室を行いました。子どもたちはすぐにルールを理解し、碁の面白さの一端を感じ取っていました。



やさしく教える三村二段

き、地域のボランティアの協力を得て、英語や読み書き算数などを教えている。ここに碁が加わることで、学校を中心とした地域の活性化につながればと、永池校長は期待を寄せていた。

最後に、授業を終えた生徒の一人の言葉を添えておこう。「今日は勝てなくて、碁って難しいと思っただけ、最後まで諦めないでやれば勝てるかもと思いました」